

「をかし」って何だろっ??

—見方・考え方を育む古典の授業

神奈川県相模原市立小山中学校校長

関口益友

1 はじめに

古典といえば「暗唱」「文法」という授業が多い。しかし、本稿では、生徒を「より深い学び」へと導く授業を提案したい。つまり、「春はあけぼの」の後には『をかし』が省略され、『をかし』は「情趣がある」と訳す」と教える授業からの脱却である。それは、「をかし」と書かずに言い切る原文を大切にすること、読者が作品に入り込み、さまざまに想像できるようになることを意味する。「より深い学び」は、生徒の次の学びを作るといふ本来的な評価につながり、古人の心に思いをはせるといふ目標の達成につながるものである。

2 指導計画（全三時間）

■目標

○古人の心に思いをはせ、自分たちと同じ

3 指導の工夫・学習の実際

- 展開
 - 第一・二時
 - ・音声を通して「春はあけぼの」と出会う。
 - ・古典の文章の特徴をまとめる。
 - ・現代語訳を味わう。
 - 第三時
 - ・比較読みで「をかし」の意味に迫る。
 - ・学習を振り返る。

① 音声を通して古典と出会う

まずは声に出して読むことを大切にしたい。授業の中では「暗唱」を必ず行ってきた。生徒がおもしろがって取り組むのはも

ちろん、出身小学校が複数ある場合に、覚えてきているかどうかなどを教師が確認できるよさがある。春夏秋冬と暗唱を区切り、苦手な生徒もそれなりに達成感を味わえるよう配慮したい。

② 古典の文章の特徴をまとめる

古典は一年生でも学習するが、文語文と口語文の違いには、生徒もとまどうことが多い。その違いや、「変だなあ」と思うところを付箋紙に書かせ、グループで話し合わせると、教師が気づかないような疑問も多数挙がる。なぜ「やうやう」を「ようよう」と読むのか。なぜ「の」を「が」と訳すのか。「い」と「な」今では使っていない。こんな疑問が挙がってきたら、しめたものだ。これをきっかけに古典の特徴をまとめ、教えることができる。

また、この学習をもとに、確認を兼ねて教科書の現代語訳を味わうことで、定着度

を上げることができる。

③ 『枕草子』の他の章段の魅力を味わう

『枕草子』には「めでたきもの」「にくきもの」「虫は」「木の花は」といった「ものづくし」の章段があり、一つのテーマのもと、それに関わるいくつもの事柄が書かれている。ここでは、「うつくしきもの」を取り上げ、「うつくし」をわざと除いた文章を配布し、題名を考えさせる。生徒は考えながらも間違いなく「かわいらしいもの」という言葉を見つける。古典語では「うつくしきもの」と表すが、今の私たちの感覚と同じだと気づくことができる。

④ 比較読みで「をかし」の意味に迫る

「はじめに」で述べたが、『をかし』は「情趣がある」と訳し、『しみじみとした味わいがある』ということだと、私も長年生徒に教えてきた。しかし、「情趣」の意味は漠然としており、わかったようでわからないというのが実態である。そこで提案したいのが比較読みである。「春はあけぼの」と、平成二十四年度版教科書三年に掲載されている随筆「朝焼けの中で」（森崎和江）とを比較して読む。この作品には、自然の表現力を前にした言葉の貧しさや、言葉に

できない世界があることのとしさが描かれている。指導のポイントを次に挙げる。

(1) 「主體的・対話的で深い学び」に

まず生徒に文章を読ませ、気づいたこと、二つの作品に共通することなどを書かせる。すると、次の(2)・(3)にまで気づく生徒も出てくるだろう。そこで、教師と生徒との対話を通して深い学びにつなげていく。

(2) 強烈な夜明けの風景

「春はあけぼの」の春は他の季節と違い、たった一つの場面についてのみ描かれている。それはなぜか。これは、清少納言が頭の中で考えたのではなく、実際に目にした強烈な体験に基づくものではないか。後朝の朝（恋人との別れ）の場面、幼少期の思い出など、生徒もさまざまなことを想像することができる。

(3) 始まりは「春はあけぼの」

『枕草子』は、第一段「春はあけぼの」から始まった。「朝焼けの中で」で、少女がその感動の中から文筆に携わるようになった原体験と、「春はあけぼの」とが結び付くのではないか。

(4) 「をかし」に迫る

ここから行うことは発想の大きなパラダイムである。「この春の夜明けの風景を清少納言は『をかし』と言った。それを私た

4 おわりに

清少納言が仕えた中宮定子の人生は、一条帝に愛されながらも、一族の没落や道長の嫌がらせなどさまざまな困難があった。清少納言は、敵対するものへの恨みつらみを書くことではなく、文化芸術を高めることで定子を必死に守ろうとした。そのキーワードが「をかし」である。この言葉を、形になって表れるものだけではない、心を表すものとして捉えることができたならば、深い学びにつながり、国語の見方・考え方はさらに深まっていくことだろう。